持続可能なグローバル化

オピニオン
持続可能なグローバル化
論点
吉見 俊哉
新自由主義終わり
歴史的な転換点に
より速く、強く、か
楽しく、しなやか

写真は毎日新聞 13 日朝刊の吉見俊哉さんインタビュー。吉見さんらしい切り口で語っており、抜粋して紹介したい。リードから―新型コロナウイルス感染拡大は、2020 年東京オリンピック・パラリンピックを延期に追い込み、米大統領選にも影響を与えた。社会学者の吉見俊哉・東京大教授は、中世のペスト流行に匹敵する世界史の転換点と今回のパンデミック（世界的大流行）を捉える。年の初めに、その中長期的な影響を含めて聞いた。

1980 年代からの新自由主義的なグローバリゼーション、いやこの数百年続いた近代資本主義にとって、歴史的な転換点と言っていいだろう。象徴的なのは、新型コロナウイルスの流行により、東京オリンピック・パラリンピックが延期されたり、トランプ米大統領が落選したりしたことだ。コロナ禍は、人も物も情報も世界中を高速で移動、流通する現在だからこそ、これだけ拡大した。そもそも、今世紀の世界的な出来事の多くは、コロナ禍を予感させるものだった。01 年の米同時多発テロは、米国のグローバルな支配で排除された人々がテロリズムによる反撃を試みた。08 年のリーマン・ショックは、グローバル資本主義の構造的破綻を示した。16 年の英国の欧州連合(EU)離脱方針の決定とトランプ大統領の誕生は、グローバル化で進んだ分断の余波だ。いずれも新自由主義的グローバリゼーションに対する反動なのだ。

歴史的に、グローバル化とパンデミックは表裏をなす。1918～19 年のスペイン風邪は、第一次世界大戦で兵士が世界中を移動して感染を広げた。19 世紀初頭に大流行したコレラは、インドの一地域の感染症だったが、大英帝国の植民地ネットワークで広がった。16 世紀には、西洋人が新大陸に持ち込んだ天然痘が爆発的に広まった。中世を終わらせた 14 世紀のペストも、モンゴル帝国が中国の一地方から欧州へ菌を運んだ。今回は、IT ベースのグローバル化の下でコロナ禍が起きた。

コロナ禍によって、我々は、この間の五輪が象徴する新自由主義的なグローバリゼーションの通用しない時代を迎えたとわかった。とはいえ、人や物の流通が活発化するのはよいことで、グローバルに社会が変容することは止めるべきではない。社会の急激な流動化はよくないが、かといって鎖国すればいいわけでもない。では、どのようなグローバリゼーションが必要か？　従来の五輪のモットー「より速く、より高く、より強く」は、経済成長主義のスローガンでもある。これは、もはや我々共通の目標ではない。今の世界的な価値は、「より楽しく、よりしなやかに、より末長く」だろう。QOL（生活の質）やレジリエンス（柔軟さ）、持続可能性の方が大切だ。その実現には、巨大イベントではなく、まちづくりやコミュニティづくり、教育の仕組みづくりといった小さな取り組みを積み重ねるほかない。そこから、ポストコロナの社会に適した、価値や社会のビジョンを見定めていく必要がある。

（2021 年 1 月 14 日）